

禪學研究

第二號

四卷楞伽に就て

伊藤古鑑

道宣の續高僧傳第十六によれば、我が宗の初祖達磨大師は、楞伽經四卷を以て二祖慧可大師に付囑し、如來心地の法要衆生悟入の樞鍵とせられたやうである、其文にいふ。

初達磨禪師、以四卷楞伽、授可曰、我觀漢地、惟有此經、仁者依行、自得度世。

また契嵩の傳法正宗記第五にも次ぎのやうな文句がある。

復謂慧可曰、此有楞伽經四卷者、蓋如來極談法要、亦可以與世開示悟入、今茲付汝。

また道景の景德傳燈錄第三にも同様の文句を掲げて居るが、これ等に依つて初祖大師は四卷楞伽を以て心地の法門とし、二祖大師に授けられたと云ふことが出来る。而して二祖より三祖に、三祖より四祖に、四祖より五祖へ四卷楞伽を

傳へて、深遠の義理を唱へ、修行の極則として居られたやうである、而して五祖は四卷楞伽に代ゆるに金剛經を以てし、常に僧俗に勸めて此經を讀誦せしめ、六祖も之れに依つて悟入せられたやうに傳へて居る、要するに四卷楞伽は初祖達磨大師より五祖に至るまで、即ち支那禪宗の初期に云ふ間は、専ら愛讀せられ研究せられて、悟道の心印させられたに云ふことは、疑ひない事實であるに申し、四卷楞伽に云へば、直ちに達磨大師に關係あるかの如く、如何なる楞伽經の末釋にも其れを書き列ねて、禪宗に密接な教義のやうに唱へて居るが、果して然りせば、四卷楞伽に於ては如何なる法門が説いてあるか、それが達磨大師の禪に如何なる程度まで關係があるか云ふことは、實に妙味ある研究問題であつて我等禪宗の末流にある者は、大に緊張して考慮せなければならぬことであらうに信する。

尤も四卷楞伽に云へば研究すべきことは極めて多い、また内容は非常に複雑であつて、加ふるに文辭も簡古であるから初學者は到底その意味だも知ることが出来ない、四卷楞伽の序文を書いた蔣之奇も「嘗苦楞伽經難讀」に云ひ、蘇東坡も「楞伽義趣幽眇、文字簡古、讀者或不_レ能_レ句」に云ひ、竹沈瀛も「人皆於_レ此經、尙不_レ成_レ句讀」に云ふて居るのを考へて見ても、四卷楞伽の難解なることは思ひ半ばに過ぐるものであらう、しかし異譯の七卷楞伽、十卷楞伽もあり、また四卷楞伽の末釋として十數種もあることであるから、それ等を通じて深く研究したならば、多少の見當が付かぬことでもない、今余輩は少しくこの四卷楞伽に就て、その得たる所感の一端を披瀝し、これに依つて將來の研究の由序させやうと思ふ。

二

智嚴の楞伽經註の序文に依つて見るに、楞伽經の梵本には廣中略の三本がある、即ち廣本に云ふのは十萬の偈頌であつて、開皇三寶錄には、その梵本の所在を于闐の南遮俱槃國の山中に云ひ、或は龍宮の殿中にも申して居る、次に中本に云

ふのは三萬六千の偈頌であつて、その内容は五十一品に分れ、その經中の或る一品には、大慧の一百八問を備さに答へて居ることも云ひ、龍樹はこれが釋論を造つて大に印度に行はれたことも傳へ、或る一説には七卷楞伽の翻譯の時に來唐した吐火羅の三藏彌陀山が、中本の梵本を印度で見たことも申して居る、次に略本云ふのは四千の偈頌であつて、更にそれを縮少し一千有餘の偈頌に作成したものが、現今流布の楞伽經に當るを傳へて居る。

已上は素より古來の傳説であつて、廣中二本の存在は實に疑はしい、華嚴經にも大日經にも、乃至は金剛頂經にも、このやうな傳説があるが、恐らくは宇宙の大文章を縮寫した云ふ意味からして、十萬頌、三萬六千頌、四千頌となつたものではなからうか、即ち三世常恒、法雨無作の演説法を以て、直ちに四卷楞伽の眞實體となし、終には自己本具の堅固心を以て、四卷楞伽の眞精神としたものではなからうか、この意味に於て、三世常恒本の必要も感じ、乃至は隨緣結集の廣中略等の説明も満たされ、また入楞伽心の根本義にも觸れるこゝが出来るのである、而して此の中、最小縮寫の略本に就て、支那に翻譯せらるゝこゝ前後四回、即ち左の如し。

一楞伽經四卷

中印度僧曇無讖譯

二楞伽阿跋多羅寶經四卷

中印度僧求那跋陀羅譯

三入楞伽經十卷

北印度僧菩提流支譯

四大乘入楞伽經七卷

于闐國僧實叉難陀譯

第一回の翻譯を涼譯云ひ、大唐內典錄第三の曇無讖譯出中に始めてその名目が出て居る、開元錄、貞元錄など、その説を受けて載せて居るが、これは北涼の元始三年、即ち西曆四百十四年に翻譯したもので、達磨大師の漢地に入らるゝ已

前一百〇六年に當つて居る、第二回の翻譯を宋譯と云ひ、出三藏記第二に求那跋陀羅の翻譯と出して居る、それより已後の諸經錄には皆この説を受けて出て居るが、これが所謂四卷楞伽と申して、達磨大師に關係深い經典と云ふのである、その翻譯は劉宋の文帝、元嘉二十年、金陵の草堂寺に於て翻譯したもの、傳へて居る、しかし譯經圖紀の説は丹陽の祇洹寺で、徒衆七百餘人と共に、此の經及び勝鬘經の翻譯に従事したとも申して居る、而してその年代は西曆四百四十三年であつて、曇無讖の死後十年、達磨大師の漢地に入らるゝ、已前七十七年に當つて居る、第三回の翻譯は魏譯と云ひ、後魏の宣武帝、延昌二年、洛陽の永寧寺に於て翻譯せられたとも、或は洛陽の汝南王の宅、及び鄴都の金華寺に於て翻譯せられたとも傳へて居る、而してその年代は西曆五百十三年であつて、達磨大師の漢地に入らるゝ、已前僅かに七年に當つて居る第四回の翻譯は唐譯と云ひ、唐の中宗、嗣聖二十一年、神都の佛授記寺に於て翻譯せられたと申して居る、これに就ても年代及び翻譯の場處に異説はあるが、兎に角この翻譯は再勘せられたもので、最も翻譯には注意せられたものゝやうに思ふ、而してその年代は西曆七百〇四年であつて、達磨大師滅後遙かに一百七十四年に當つて居る。

已上の四譯の中、惜しい事には第一回の涼譯を缺き、現存して居るものは唯だ後の三譯のみで、これを常に四卷楞伽、十卷楞伽、七卷楞伽と申して居る、而してその翻譯内容に對する批評は、最後の七卷楞伽の譯場に列し、而かも入楞伽心立義を書いた華嚴の賢首大師が、次ぎのやうに述べて居る。

其四卷、回文不盡、語順_ニ西音_ニ、致_レ令_レ髦彦英哲、措解無_レ由、愚類庸夫、強權_ニ雅解_ニ、其十卷、雖_ニ文品少具_ニ、聖意難_レ顯、加_レ字混_レ文者、泥_ニ於意_ニ、或致_レ有_レ錯、遂使_ニ明明正理_ニ、滯_ニ以_ニ方言_ニ、聖上慨_ニ此難通_ニ、復令_ニ更譯_ニ、今則詳_ニ五梵本_ニ、勘_ニ二漢文_ニ、取_ニ其所得_ニ、正_ニ其所失_ニ、累載優業、當_レ盡_ニ其旨_ニ、庶令_ニ學者幸無_ニ訛謬_ニ。

かくの如く七卷楞伽の翻譯を以て訛謬なしと批評して居るが、しかし世間に最も多く流布し、良く研究せられたものは七卷楞伽でなくして四卷楞伽である、従つて其の末釋も極めて多い、それ云ふものは達磨大師に關係あること、一は早くから翻譯せられて世に賞讃された結果であらうと思ふ、宗泐如玘の四卷楞伽注解には、この意味のことを次ぎのやうに述べて居る。

若論_三所譯之難易_二、則唐之七卷、文易義顯、始末具備、今釋從_三宋譯四卷_二者、以_レ此本首行_三於世_二、習誦者衆、況達磨大師、授_三祖心法_二時、指_三楞伽四卷_二、可_レ以印_レ心、而張方平嘗書_三此本_二、蘇子瞻爲序_三其事_二、是知歷代多從_三此本_二也、然文辭簡古、至_三於句讀有_レ不可_レ讀、乃取_三七卷中文義顯著_二釋_レ之

七卷楞伽は最後の翻譯であるから、勿論前譯二本の煩略を考へて、文章も平易に説き、義理も具備して、比較的良譯云ふことが出来る、即ち四卷楞伽は難解の經典であつて、髡彦英哲の上士と雖も、容易に深理を知悉することは出来ない、それに引き換へ、十卷楞伽は錯誤が多いと云ふことは、賢首大師の云はるゝ通りであるから、餘りに流布せない、従つて余輩の寡聞いまだその末釋の名あることを知らない、故に七卷楞伽に依つて、四卷楞伽の意の足らぬところ、及び義理の不明なところを解釋して行くのが、一番穩當な研究の方法であらうと信ずる。

因みに大日本續藏經に收むる楞伽經の末釋の中、入楞伽心玄義、楞伽經通義は第一輯第二十五套第三冊に、楞伽經集註觀楞伽經記は同第四冊と第五冊とに、楞伽經註、楞伽經疏、楞伽經纂、楞伽經精解評林は第一輯第九十一套第二冊に、大乘入楞伽經註は同三冊に現存して居る、その中に於て最も傑出して居るものは、賢首の入楞伽心玄義と正受の楞伽經集註とであらう、前者は七卷楞伽の綱要を述べ、後者は四卷楞伽の精華を集めて居る、云ふまでもなく賢首は華嚴宗の開祖であ

り、正受は普燈錄の著者であつて共に有名な人である。また日本大藏經の中に收むる楞伽經の末釋は、佛語心論、佛語心論口訣、楞伽經論折衷、楞伽或問、入楞伽心立義、入楞伽心立義纂要鈔等であつて、その中最も有名なものは虎關の佛語心論であらう、良く佛語の心品を演暢し、宗通の傳説、直傳の宗旨を鮮明にしたもので、特に濟門の末宿の好んで玩味するところのものである。

三

四卷楞伽の經題を楞伽阿跋陀羅寶經と申して居る、楞伽は是れ城の名、支那には不可往と云、難往入と云か譯して居る、その城は南海の摩羅山の頂きにあつて海拔二萬里、凡庸のもの、到底往くことを許さないもので、此の處に於て説法せられたと云ふことは、即ち象徴的の意味があつて、處を以て法を表じたものである、如來内證聖智の境界は、一切の賢聖と云はれる人でも證入することは六ヶ數い、阿跋多羅寶とて無上尊貴の法を體驗することは難いと申されたものであらう、従つて此の四卷楞伽の文相も素より凡庸の窺知するところのものではない、難解難入の經典であることは、前既に屢々述べた通りである、楞伽集註の著者たる正受の閣筆記にも、「敬讀此經、句義漠然、不能終卷」云ひ、更に「法親布納被教、並照見魏唐二譯、創疑凝冰釋、焚香對席、鉤索深隱、探摭精要」云書いてあるのを見て、如何に四卷楞伽の難讀なるかは知るに充分である、而して此の難讀な四卷楞伽には何の意味が説いてあるか云ふに、養存の楞伽經折衷には、此の經の宗趣を論じて、次ぎのやうな文句がある。

諸經泛說文義繁衍、而其中各皆有宗旨、學者閱經、不知宗趣、惑諸名相、失佛經意、今此宗趣、以第一義心爲宗、妄想無性爲趣、即下經曰、此是過去未來現在、諸如來性自性第一義心、魏譯文曰、寂滅者名爲一心、一心者名

如來藏。又下經云、前聖所知轉相傳授、妄想無性、其義率見各章。

これに依つて見るに、四卷楞伽は第一義心を以て宗とし、妄想無性を以て趣とするに云へやう、しかし此の宗趣に云ふことは、入楞伽心立義にもある通り、「語之所表曰宗、宗之所歸曰趣」を申して、十種の宗趣を列擧して居るが、要するに一經の歸趣本旨を呼んで宗趣と云ひ、その見やうに依つては十種にも區分せらるゝであらうけれども、大體に於て一であらねばならぬ、宗趣が十種もあつては大變である、今諸家の楞伽經に對する宗趣を申すに、探遂の入楞伽心立義纂要鈔には、次のやうな文句がある。

或云、以五法三自性八識二無我爲宗(李通玄)

或云、以實相佛語心自覺聖智爲宗(智覺延壽)

或云、以第一義心爲宗、以妄想無性爲趣(潤一雨)

或云、以性第一義心修淨識爲宗(虎關)

或云、以了妄無性爲宗(栢庭善月)

或云、以唯心直進自覺聖智爲宗(智旭)

即ち宗趣は其の人々の見やうに依つて相違はあるが、直接四卷楞伽の文相に依つて申すに、非常に雜多なる問題に就て説かれて居るから、何れが眞の宗趣であるか了解に苦しむけれども、先づ第一に四卷楞伽の中心思想は、般若經中觀論等の空思想より漸次發展した大乘起信論なきに同じ筆法に論じて居るやうに思はれる、即ち生死を涅槃を畢竟無差別に説いて、「一切法無二、非於涅槃彼生死、非於生死彼涅槃」を云ひ、更に一轉化して唯心的な思想を述べ、終に

は識の分別を立て、「眞識、現識、分別事識」を云ひ、「轉相、業相、眞相」に分けて居る邊は起信論を良く似て居る、その他、如來藏說法を云ひ、自性清淨心を水波に喩へた如きは、殆んど起信論と同一の感を抱くのである、故に淨影の起信論義疏には「依楞伽經、造起信論一卷也、難文略少、義無不盡」を云ひ、起信論は恰かも楞伽論の別申論の如く説いて居る、しかし起信論の注釋者にして有名な元曉や賢首は、それ程までに云つて居らぬ、けれども起信論と楞伽經との關係の密接なることは、とても他經と同日の比ではない、その有力なる證據は、元曉の起信論疏にも楞伽經の本文を引證する處が十數箇處の多きに上り、また賢首の起信論義記にも、眞如生滅二門の關係を釋する處に楞伽經の三文を引證し、尙ほ「廣如二部楞伽中説」を云ひ（華嚴家にては主として七卷楞伽を用ゆ、しかし賢首の常に引用せられたのは、四卷楞伽、十卷楞伽であつて、今の二部楞伽の文もそれを指す言葉であらう）また「不生不滅、與生滅和合、非一非異、名爲阿梨耶識」の論文を釋する處には、「今此論主、總括彼楞伽經上下文意、作此安立」をさへ云ふて居るのを見ても、如何に楞伽經と起信論とが、その教義の關係上、甚だ密接なる交渉のあることを知るに充分であらうと思ふ。

かくの如く楞伽經と起信論とは深い關係があるが、然らば禪宗の教義とは如何なる程度まで交渉があるか云ふに、先づ第一に注意すべきは第一義を云ふ思想である、即ち第一義に就ては「非言說是第一義、亦非所說是第一義」を云ひ、第一義諦の處は名字章句の立する處ではない、一切の修多羅は月をゆびさす指のやうなものであると結び、更に釋尊四十五年間の御說法は不説一字であるを云ふことを述べて、

我從某夜得最上覺、乃至某夜入般涅槃、於其中間、乃至不説一字、亦不説當說、不說是佛說

こ云ひ、尙ほ禪を分類して、愚夫所行禪、觀察義禪、攀緣如禪、如來禪等の四種類をなし、その一々に就て説明を加へてある、その他、宗通説通の説、五無間業の善用、佛心宗の名稱等は、みな此の楞伽經より胚胎したものであると云ふことは、既に學者の多く研究せられた結果であつて、今更余輩の呶々を要するまでもないことで、松本博士の達磨第九節、忽滑谷博士の禪學思想史支那第二編第三章各節等に詳論せられて居るから見るに良い。

いま余輩の考へを卒直に申せば、四卷楞伽を以て禪家の諸師が重用視するのも無理はないと思ふ、たゞへ達磨大師の二祖付屬の事實がないにしても、この經全體の趣旨が佛語心で以て徹底して居る、即ち四卷楞伽の内容は、申すまでもなく佛語心品第一第二第三第四で以て全卷押し通されて居るではないか、この佛語心呼んで何ぞ爲すか、起信論には一心眞如と云ひ、如來藏心とも名づけて居る、賢首は滿部の都名と云ひ、中心要妙とも説いて居る、清涼圭峰は總該萬有の一心とも呼んで居るが、それは且らく華嚴家より與へた楞伽の佛語心である、決して佛語心の眞面目に觸れたものとは云へない、何となれば彼等華嚴家の呼んだものは、盡く楞伽經を以て終教當分の教義として取扱つて居る、或は頓教の教義をなし、更に上ほせて同教一乗の教義とする人もないではないが、しかしまだ楞伽經を以て最上乘のものとはせない、佛語心を以て眞に法身の心印たることを了知せないのである、かの有名な佛語心論の著者虎關師鍊禪師は、佛祖統紀に於て楞伽經を佛成道後十五年の方等時に入れて居るのを笑破し、更に魏唐二譯の勸請品舍利品等の意に依つて、涅槃經も同時の説なりと唱へ、釋尊最後の御說法であるから、その教理も最も深玄なものであると主張して居らるゝが、その教理の深玄なることは素より論を俟たず、この經全體が法身の心印であつて、自覺聖智の境界を丸出しにしての御說法であること云ふことを忘れてはならぬ。いま余輩は羊眼狸智、その眞髓を探り宗趣を宣揚すること云ふことは出来ないけれども、唯だ單に一經の

最初の教主問題のみに就て、その卑見の一端を少しく論じ、以て楞伽の法身の心印なることを詮顯して見やうと思ふ。

四

さて此の四卷楞伽は如何なる教主に依つて説かれたものであらうか、即ちこの教主を云ふことは、能説の教主の資格であつて、深玄な教理であればあるほぎ、最勝の佛身を現ぜられるを云ふ譯で、人法は同であるから、各宗にも其の所依の經典の教主問題に就ては、全力を注いで討究するのである、而して此の楞伽經の如きは如何なる佛身であらうか、その佛身の如何に依つて法の深淺を判することが出来る。

先づ此の佛身に關する分類は古來より種々なる異説があつて一定せない、或は二身三身、或は四身十身なき、云ふ説があるが、その中最も普通に用ひられて居るのは法報應の三身分別であつて、法身は諸佛の眞身理智の法性を指し、自然に具足する常住無爲の法體である、報身は過去の功德に報ゆる八萬四千の圓滿完全の佛身を指し、地上の菩薩の爲めに唯一乗法の深玄なる教理を説く法身影像の佛體である、應身は地前の菩薩及び二乘凡夫の爲めに應現して、聲緣菩薩の三乘を説く丈六卑小の佛身を指し、三十二相八十種好を具足した八相成道、轉變無窮の佛體である、故に應身は緣謝即滅機興則生の佛であるから、その説法は極めて淺い、報身になる應身の如き暫現の佛體ではないから、内には法身の自内證を得、外には十地の菩薩の爲めに内證を傳説する佛體であるを云ふが、更に法身になるを、諸佛内證聖智の境界であつて、無相寂滅の體性であるを云ひ、等覺已還のところで機縁もない、また形色音聲を云ふやうなものもないから、説法の義なしを見るのが、諸經共通の説相である。

然らば四卷楞伽の教主を如何にして法身を定めるか云ふに、虎關の佛語心論には左の通り云うて居る。

此經說主、毘盧法身、曰法身無相、無有言說、何故是經立法身說、曰法佛無說、是應佛談、非眞佛說、故此經云、法佛說、自覺聖智境界、是以如來養頭酬酢大慧、偈云、我當爲汝說自覺之境界、其餘法說、往往而在、我於其所以、剖判昭晰、下卷當見、故不繁此、況大毘盧遮那經等、大藏之中、法說不一、不勝備舉。

此れに依つて見れば、明かに楞伽經の教主は毘盧遮那法身の御說法である云ふことが出来る、けれども、此處に議論の焦點となるのは、前にも述べた通り、法身無說法云ふのが諸經共通の説相であるから、今の教主も法身毘盧遮那如來である云ふことは、少々受取れぬ話ではないか、これに就て佛語心論には巧妙な説明を加へて、法身無説云ふのは應化の所談で、眞佛から見れば常に自覺聖智の境界を說法して居られるのである、故に應化の佛は衆生の機根の前に假りに現はれた佛であつて、眞佛は實際に不生不滅の佛體である云ふのである、即ち楞伽經には佛身を立て、化佛を報生佛と如如佛を智慧佛を擧げて居るが、前の二身は報應の二身で、如如佛は法身、智慧佛は自受用報身とも智法身とも見らるべきものであらう、而して此等四身の説法の相違も楞伽經には明してあるが、要するに法佛説法の義は凡夫迷情の攀縁を離れ、良く無念にして一切法界に融會することの出来る自覺聖智所縁の境界を指すので、法性の眞理は長く法性の眞理を說法して、如何なるものにも傾聽せしめずんば止まぬ云ふことであらう。

更に法佛説法の義を敷衍して申すならば、大凡そ言説には四種言説あり云ふて、楞伽經には相言説、夢言説、過妄想計着言説、無始妄想言説を擧げて解釋して居るが、此等は皆我等衆生の頭胸、喉、鼻、唇舌、斷齒和合の音聲であつても第一義は説明することが出来ない、經文にも、

第一義者、聖智自覺所得、非言說妄想覺境界、是故言說妄想、不顯示第一義、言說者、生滅動搖、展轉因緣起、若

展轉因緣起者、彼不顯示第一義

實際に如來聖智の境界は説けない云ふ意味ではない、即ち如來内證自覺の境界は法佛が説かれるので、經文の偈には「我當爲汝説自覺之境界」云ふてあるのは、正しく法佛説法の深意を示し、四卷楞伽の教主法身なることを明したものである、依つて自覺聖智の境界には聖知、聖見、聖慧眼ありと説き、而かも言説には生滅あれど、義には生滅がない、故に法身は如義の言説を以て説法せらるゝ云ふのである、此の如義の言説云ふことは、密教に於て盛んに云ふ言葉であるが、しかし、その思想の系統から云ふと、此の楞伽經の方が其の根源を爲して居る、即ち楞伽經に説く四種言説に加ふるに如義言説を以てし、これに依つて五種言説の名字を釋摩訶衍論に立て、居るのである、故に密教の法身説法の思想は、素より兩部の大經に淵源する云ふけれども、此の五種言説の思想は楞伽經に依つて居るもの云はなければならぬ、此の四卷楞伽に於ては明かに四種言説の名字を唱へ、而かも此の四種言説に於ては、如來内證自覺の境界は説けない、説けない云ふて、全然説けない云ふ意味ではない、聖知、聖見、聖慧眼を具有する法身に於て、始めて其の境界を自由自在に説破することが出来ると云ひ、「我當爲汝説自覺之境界」申して、楞伽經全體は法身説法の全文なることを明確に顯はし、その佛身分別から云へば、第三の如々佛が内證自覺の其儘を説法せられたもので、これを如義言説の説法云はずして何云へやう。

話は少しく横道に入るかも知れぬが、密教に於ても楞伽經を非常に大切に居る、弘法大師の如きは楞伽經を法身説法なりと云ふて二教論に引證して居られる、しかし楞伽經云ふても十卷楞伽であつて、十卷楞伽の第九卷には、佛自内證の境界は龍樹菩薩が出て、敷衍すること説いてあるから、特に十卷楞伽の懸記に依つて、密教は龍樹菩薩の所傳と申して

居る、七卷楞伽には第六の偈頌品に此の文があるけれども少しく違ふ、四卷楞伽に至つては全く龍樹懸記の文は缺けて居る、故に密教では十卷楞伽を以て非常に大切に用ひ、顯教の經典は云へ、往生有斯義の法相に依つて祕密の實理ありと申し、法身說法の例語にまで擧げて居られる、委しきこゝは弘法大師の二教論及び付法傳に出て居るから見るに良い。

五

已上の如く楞伽經の教主は最上最尊の法身であるから、その所説の法門も甚深難思、こゝても凡庸の窺ひ知るにころではないが、然らば其の御說法になつた場處は云ふに、南閩部洲の南海濱にある楞伽山であるから、穢土云はねばならぬ此れに就て李長者は華嚴論の中に、楞伽經を化身說法なりと云ひ、境界が穢土であるから、所説の法門も低いと云ふて居るが、これは未だ楞伽の眞意に精通した人の言は云へぬ、即ち此の穢土を外にして、別に淨土と云ふべきものがあるのではない、此の穢土たる娑婆世界に即して法身の上には立派な常寂光淨土となるのである、故に前にも云ひし如く、楞伽經の教主は清淨法身であるから、その所説の法門も最尊最勝なるこゝは勿論である、密教は之れに依つて顯教の經典の權多實少の例證に擧げて、顯教の經典にも往々に祕密の實理を明して居ると云ひ、見るものゝ眼にも矢張り密教の深旨を悟得するこゝが出来ると申して、楞伽經を尊んで居る、また我が禪宗に於ても、初祖大師を始め二祖三祖四祖は、如來極談の法要と云ひ、衆生悟入の樞鍵と呼び、或は宋朝已後の祖師が好んで論を造り疏を述べて、諸佛内證の法門とも、教外別傳の宗證とも賞讃して居らるゝ、尙ほ此等に就ても多少の所感を抱いて居るのであるが、それは後日更に深く研究するこゝとなし、今は唯だその由序の一端を論じたるに過ぎず、論旨滅裂伏して叱正を乞ふ。